中村幸彦著述集

第三巻

©一九八三

中村幸彦著述集　第三巻
定価七〇〇〇円
昭和五十八年五月十日印刷
昭和五十八年五月二十日発行
著者　中村幸彦
発行者　高梨茂
印刷者　青木勇
発行所　中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二―八―七
振替東京二―三四
検印廃止

中村幸彦著述集　第三巻　近世文芸賸稿

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

一　研究方法　九

1　近世文学史の構想（九）
2　専門白痴的考証法（一九）
3　『文学』と私（二七）
4　補助学との間（三一）
5　近世出版事典（三六）
6　国文学研究の場（三九）

二　時代精神　四三

1　近世文学精神の流れ（四三）
2　近世小説に於ける三教一致思想の推移（九三）
3　大衆化の志向（一〇三）
4　近世的なるものの否定の様相（一二五）

三　作家環境　一三五

1　文人と宗匠（一三五）
2　江戸文人の生活（一四〇）
3　平民文学俗文学の弁（一五七）
4　荷風と戯作者（一六四）

四　小説小論　一八〇

1　江戸諷刺小説について（一八〇）
2　西鶴の組材（一九一）
3　天下の町人考（一九九）
4　血かたびらの説（二一一）

5 樊噲—春雨物語小論（二三八）
6 茶瓶酔言と胆大小心録（二四〇）
7 怪異の世紀（二五九）

五 浄瑠璃、歌舞伎 二六五

1 浄瑠璃絵尽の効用（二六五）
2 近松作品中の遊里（二八六）
3 傾城妻恋桜（三〇〇）
4 御家狂言におけるかぶき性—加賀騒動の芝居と実録体小説（三一〇）
5 狂言伎語（三三）

六 川柳、雑俳 三三八

1 悪口の文学—川柳、酒落本の素描（三三八）
2 川柳と酒落本（三四二）
3 川柳における詠史句（三五三）
4 地方雑俳研究を提唱する（三五八）
5 誹諧あるが中—元禄六年前句附会所本（三七二）
6 落書やなきたる（三七六）
7 冠句のおもしろさ（三八二）
8 川柳雑俳寸感（三八六）

七 近世歌謡資料二三 三八九

八 古典と近世文学 四一一

1 伊勢物語と近世文学（四一一）
2 源氏物語の近世文学への影響（四三）
3 方丈記、徒然草の近世的享受（四四）
4 徒然草受容史（四五七）

5 芭蕉と近世文学（四六八）
後記　四八一
書誌　四八三

〈挿画〉

百二十石　六
書画会莚　一五三
居家計名惜　一五五
世間御旗本容気　一八七
血かたびら　二二二
茶飯酔言（桂窓本）　二四二
胆大小心録（自筆）　二四四
浄瑠璃絵尽　二六六、二六七
明和新訂大坂大絵図　二九二、二九五
傾城妻恋桜　三〇五
見語大鳳撰　三一七
自来也説話　三三二
前句扣日記　三七〇
俳諧あるが中　三七四
仁勢物語　四一三
風流源氏物語　四三三
犬方丈記　四四八
慰草　四五一
子犬つれ〳〵　四五五

近世文芸賸稿

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

一　研究方法

1　近世文学史の構想

一

文学史の対象は、政治史、経済史の対象が、それぞれ政治生活、経済生活である如くに、文学生活でなければならない。多くの既出の文学史が採って来た、作品と作家のみといってよい対象の選択は、政治史、経済史が統治者側にかたよれば、不完備であるが如く、その文学史を不完備にしている。政治史などで、被治者も加える如く、鑑賞者等々をも加えた、全円的な文学生活を、文学史は対象とすべきである。ただし如何なる場合でも、作品を中心に置かなくして成立しないことは勿論である。文学生活の生態については、かつて森修氏も（『文学史研究』第七号）論示されたことがあったが、大体次の如き要素が、作品を中心に、年輪的な図式をもって、展開している。作品を創作する作家、作品を鑑賞する鑑賞者、そして、作家と鑑賞者の間に、作品を伝播する伝播者の三つの人的要素が、先ず作品を囲繞する。例を近世に求めれば、自ら近世文学史の構想を語ることになろうと考

え、その方法を以下とることにすれば、伝播者としては、近世において日本では始めて出現した書肆を第一にあげるべきである。戯曲では、演劇として戯曲を鑑賞者に提供する劇場経営者や演技者がこれにあたる。作家と鑑賞者も、俳席などでは、その席の連衆が、相互にこれをかねるなど色々の例があって、考える程に簡単ではない。以上の人的要素をつつんで、その外側に壇がある。作品様式によって、歌、俳、劇、文壇など、さまざまである。それも人数の上で小さいもの、地域的に狭い壇から、次第にそれらを統合する大きな壇へと幾重にも層をなして存在する。壇を形成するのは、前出の人的要素であるが、出来上ると、かえってその人々をも支配する文学的な主義主張とか流行色などを持つ。俳壇における、貞門、談林、蕉風の如くである。壇においては、違った主義主張のものが対立して、評論批評を展開することも、珍しくない。諸々の文学様式の壇を全部ふくんで、文学界が想定され、文学をも含んで諸芸術を合せた芸術界を考えてもよい。芸術界の外界に、思想界乃至は文化生活界の如きがある。儒教や儒教を中心の三教一致の思想で指導された近世では、倫理問題が文学でも肯定否定いずれであれ、大きな関心であっただけに、この思想界の存在は殊に注意を要する。その外界に、政治生活、経済生活または民俗学的な生活など社会生活がまた幾重にも、作品をつつむ。文学界には文学思潮、芸術界には芸術観、思想界には文学意識あり、人生観、社会観あり、その内側にある各要素（作家や壇）を通して、それら精神的なものも作品に影響する。作家が文人とか戯作者などいう姿勢を採るに到るには、社会生活の中における生き方に大きな原因があると考えられる。

作品は、拠って、以上の外部の諸要素の作用影響をうける。諸要素の間にも互に影響があり、作品もそれに作用影響する。今は図式的に示したけれども、この相互作用の具体的ないとなみが文学生活であって、文学史の主対象である。

以上の相互作用は、時代により作品により、作家により相違している。年輪的な図式が、等間隔には画けないのである。例えば近世初期の仮名草子の啓蒙的な作品は、思想界との作用が甚だ濃厚である。図式でいえば、作品に近い文学界や芸術界の年輪の間隔が狭くなって、思想界の輪が広く、作品に近づく形になる。天明狂歌の発生期などでは、思想界などは狭く、小さい狂歌壇の部分が広く大きく作品に作用する。どんな作品でも一様に、当代の文学意識とか、政治経済社会の影響を蒙るなどとは、考えがたいであろう。一つの時代に、そして同じ様式に例をとっても、一つ一つの作品は、違った文学生活の図式を持っている。ましてや作家、様式の違った、西鶴、芭蕉、近松の作品が同じ図式で片づけられるはずがない。けれども、その各図式を重ねて見れば、同じ時代のものには、同じ部分で正に重なる部分が発見されるのも亦事実である。そうした違いながらも重なる部分を持つものを、幾つも幾つも重ねることによって、一時代の全文学作品をめぐる全文学作品の年輪的図式が作り得るはずである。そうして作り得た色々な時代の図式を年代順につらねて見れば、時代の流れに従って、材木をたて割りにした目の如く、年輪的な諸要素の作品との影響作用が、広狭さまざまに変化してゆく様が見定め得るであろう。文学史の主対象は、実は文学生活のこの推移の様相にある。文学史の時代区分の線は、その年輪の流れの大きな変化の接点において引けばよいことになる。

幸に戦後は、作品について、鑑賞者、伝播者、文学思潮、社会のあり方との問題など、各方面へ研究の触手が及んでいる。それらの益々進展する成果の上に、以上の如き文学生活を対象とする文学史の出現することを待ち望んでいる。

二

近世の社会は、中央集権的で封建的である。その社会に生活し、その社会を肯定し或は否定するものも、物の考え方に、その社会の反映が認められる。文学生活の社会も亦、中央集権的に封建的であって、さまざまの階層や区劃（セクション）が認められる。一に、当時は雅俗と区別していた伝統的文学群（和歌和文漢詩漢文）と近世に新興の文学群（俳諧、浄瑠璃、歌舞伎、近世小説など）の別が、自然に社会の常識として存在した。前者が何か正統でとりすましして、芸術的であるように考えられ、後者はそのかわり、生活に密着して生々しいいぶきを伝えるものではあった。二に、同一様式の中でも、例えば、連句文芸に、連歌（これまでの近世文学史の表面では殆どあつかわれないが、実際にはなお多く存在していた）、俳諧、雑俳と、階層的に考えられた種類がある如きをさす。三に、近世社会は既に、身分、階級、職業、性別、年齢、教養、地域など、様々の要素が組み合って出来た、それぞれの区劃でくぎられ、人々はその一つの中で具体的な生活を営んでいた。文学も、殊に生活に密着する性質のある俗文学では、それぞれの区劃向に作られるものがあった。読本と、その絵入ダイゼストである合巻とでは、後者が教養の乏しい、年少や、女性の間の読物と初めから意識して作られた相違があった。洒落本、黄表紙の一部（最も文学的なもの）と、後期滑稽本とでは、前者が都会趣味や感性の洗錬を読者に予想したが、後者は大衆向に作られた相違があるなどである。四に、一つの作品でも、鑑賞者の方が前述した如き区劃的生活を営んでいた故に、その享受の仕方が違う場合もあった。初期の俳諧は、和歌連歌をよくする教養人にとっては、慰みにすぎなかったが、一般には、当時の俳壇の指導者達が口にしているように、かなりの程度に教養の意義があった。五に、又同一様式の作品にかかわっても、作家のその文学にかける気魄やいだいた意識において、階層が出来る。芭蕉は、自己の文

学を夏炉冬扇の如しなどいいつつも、決して無用の慰みとは考えていない。俗文学に属する俳諧を、雅文学の域に向上せしめることを念願とした。同じ蕉門ながら支考は、芭蕉が向上せしめたことを前提としてではあるが、むしろ俗文学の中に位置せしめることに、意義を認めようとした如くにである。

その上、これは、何時の時代にも認め得る現象であるが、文学を大別して、詩、戯曲、散文（小説）とわければ、この三者が時代によって、違った位層的関係を持っていた。中古の和歌（詩）は、物語（散文）に対して優位にあり、近代の小説（散文）は、あらゆる文学形式に対して指導的であるなどの如くにである。そして、その位層の上下の判明は、簡単には、相互影響の流れを受ける方が、勿論下である。近世の小説に例をとれば、西鶴の文章が俳諧的であり、西鶴など俳人が、作家群の中心を占めていた浮世草子前期では、既に散文精神の旺盛さは認め得ても、俳諧（詩）の下に位置していたことになる。八文字屋本の時代物から読本の初めにかけて、小説は歌舞伎浄瑠璃のあらわな影響を受けた。この時は、戯曲の下位にあったことになる。しかるに文化から後は、この影響の流れは逆流して、読本、時には滑稽本の劇化さえ出現し、幕末の小説の位層は、近代の如く小説の優位を次第にとりつつあったことを物語る。かくの如く位層をなし変化したのである。この種々の位層関係から生ずる様々の現象、又その変化は文学生活のいとなみのあらわれであって、勿論無視出来ない。

年輪的図式の上にこの位層的図式を組合せた立体的な文学生活の各時代の様相とその推移を文学史はうかがうこととなる。

三

文学生活の推移を流動的にうかがう場合にも亦、一様には考え得ない。俳諧―雑俳―川柳という推移変化は、

明らかに川柳時代に入っても、俳諧、雑俳ともに別に存在していることからして、分派して異質的なものに成長したと考えてよい。小説の仮名草子―浮世草子―読本などの場合では、浮世草子時代に入れば、仮名草子的なものは減少して衰滅する。よって浮世草子は仮名草子の持ったあらゆる要素を呑吐したとも考えられる。そうしたことは、八文字屋本時代物と読本の場合などの如くにあり得るけれども、仮名草子―浮世草子では違っているようである。仮名草子には宗教論や社会批評や倫理説などが生々しく入っている。これを小説のあるべき姿と見るならば、そうしたものを吐出した浮世草子は、挫折したなどという論も成立つ。が仮名草子を小説として渾然と見ずして、過渡的混然の姿で、当時の人から見て文学としての異質物を含んでいた故に、これを吐出して、文学的な近世小説を形成する方向をたどったのが浮世草子の歴史であり、仮名草子の中の、倫理説、宗教論、社会批評などは、浮世草子時代には、小説とは別の姿で存在したと見れば、挫折ではなくて文学的浄化と解することも出来る。浮世草子末期には、談義本があらわれて、小説らしいものの中に、社会批評や人生論などが再び生々しく現れる（人生論や社会批評が、小説らしい姿をしたと解してもよい）。そして洒落本、滑稽本となって、談義本が消滅した後に、社会批評や人生論は、別の姿をとって多く出版されている。この場合は、挫折などという評論はまだないようであるが、甚だ相似た現象である。このことは文学の一様式は前出のものを呑吐し、既成のものから分派して、そのもの自体で推移することもあるけれども、文学以外のものとの接近、分離で変化することもあることを教えるであろう。ましてや、文学の様式相互間の影響も考えねばならぬ。読本は八文字屋本時代物を呑吐しながら、中国白話小説や、実録体小説や、仏教長編説話など、さまざまのものを採り入れて、その様式を確立した。近世の歌論に、内外の漢詩論の影響したことは色々の研究が出ている。同時代や前後したものの影響のみでなく、外国のものも、又真淵らの万葉調に見る、時代をへだてたものの影響もある。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com